

認知症になっても安心して暮らせる社会を

月刊 POLE-POLE (スワヒリ語)

ぼ～れぼ～れ

ゆっくり やさしく おだやかに

理念

認知症の人と家族の会

認知症になったとしても、介護する側になったとしても、人としての尊厳が守られ日々の暮らしが安穩に続けられなければならない。認知症の人と家族の会は、ともに励ましあい助け合って、人として実りある人生を送るとともに、認知症になっても安心して暮らせる社会の実現を希求する。

「ぼ～れぼ～れ群馬県支部版」

わたぼうし

No.505

巻頭言

多彩に展開されたアルツハイマー月間

今年のアルツハイマー月間は、例年にも増して様々な取り組みが多彩に行われているという感を強くしました。マスコミ報道も頻繁でした。

群馬県支部においても同様でした。

21日の記念講演会では、初めての試みとして、RUN 伴ぐんま実行委員会、作業療法士会、認知症ケア専門士会、伴走型支援事業所「居場所」、介護福祉士会にお声掛けし、講演会の会場内にブースを設置していただきました。結果、いっぴなく会場内が活気に満ちた印象を受け、試みは成功でした。

また、講演会の一部として、群馬県支部の活動を理解していただくために、「つどい」を模範的に演じて見てもらおう、と企画し、それを実現できたことです。当日を迎えるまでに、シナリオ作成役、演者として選ばれたメンバーは、ラインでリハーサルを繰り返し、シナリオを修正し、努力を続けてくれました。その成果は、確かに参加者に伝わったと思います。

荒井先生も、これから私たちが指針とすべきところをたくさん含んだ講演を熱を持って語っていただきました。

そして、その余韻に浸る間もなく県庁前に移動し全国の「家族の会」の仲間とのライトアップ中継に臨み、充実したアルツハイマーデー（認知症の日）の一日を終えました。

目次

巻頭言

多彩に展開されたアルツハイマー月間

・今年の記念講演会の報告(1)

・投稿 認知症の人も安心して治療を受けられるよう理解ある医師の増えることを切

に望みます

・今年の記念講演会の報告(2)

・「わが家の認知症ケア手帳」(64)

・今年の記念講演会の報告(3)

・

1 頁

2 頁

2 頁

3 頁

3 頁

4 頁

4 頁

これからの予定

● 10月11日(土) 桐生つどい

10時～12時 桐生市総合福祉センター

● 10月12日(日) 渋川つどい

10時～12時 渋川市中央公民館

● 10月18日(土) 太田つどい

10時～12時 太田市蕪川行政センター

● 10月19日(日) 県央つどい

10時～12時 県社会福祉総合センター

7階 701会議室

電話相談

◎群馬県支部(群馬県からの委託事業)

認知症の人と家族のための電話相談

027(289)2740

◎本部フリーダイヤル

0120(294)456

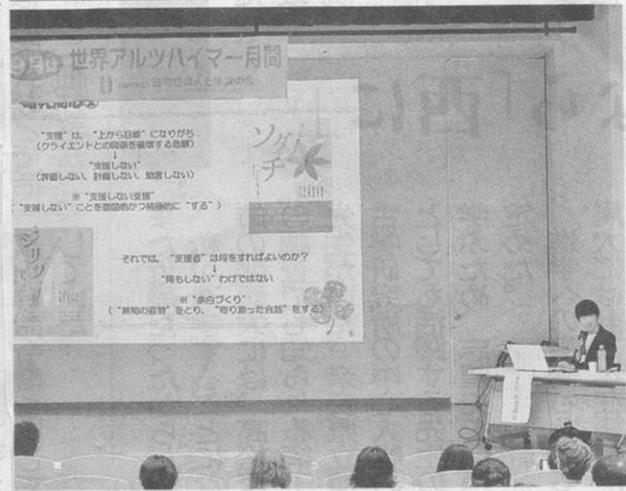
X(旧 Twitter)

やっています



9月21日

世界アルツハイマーデー（認知症の日）
記念講演会開催、夜にはオレンジライトアップ中継に参加



認知症ケアの心構えについて
講演する駒沢大の荒井教授

認知症の人と家族の会県支部 支援の在り方考える

前橋で記念講演会

認知症の日（世界アルツハイマーデー）に合わせ、認知症の人と家族の会県支部は21日、前橋市の県社会福祉総合センターで記念講演を開いた。2部構成を深めた。

成で「認知症の人と家族を支える支援とは」をテーマに、誰もがなり得るとされる認知症の人の家族の支援について約160人が理解を深めた。1部では同会の役割を説明し、主な活動の

「家族のつどい」は「どうしようもない心の悲しさを支え合う場」として、県内6地域で開いていると紹介。4人が進行役の世話人、家族、専門職役を演じ、悩みやつらさを共感する語らいの場の雰囲気



2部は、駒沢大の荒井浩道教授が、語りに注目した「ナラティブ・アプローチ」の立場から考える支援について講演。認知症ケアの心構えとして「自分や他人がこだわらる価値に気付くことが重要」とした上で、「認知症の人が100人いたら症状も100通り。寄り添う時は無知の姿勢を取ることが必要」と強調した。

同会は1980年に京都で始まり、47都道府県に支部がある。県支部の田部井康夫代表は「人に言えないで苦しんでいる人の気持ち

認知症の人も安心して治療を受けられるよう
理解ある医師の増えることを切に望みます

会員 S・T

今年6月グループホームに入所している要介護3の夫が、持病の膝関節の脱臼で外科病院へ運ばれたとの連絡が施設から入りました。すぐ病院に駆けつけ診察に同行しました。医師はまずレントゲン撮影をとのこと。痛みを訴えている夫は撮影台に上がることも拒否。医師はレントゲン写真を撮らないと診察はできない。説得してくださいと言

「何ならほかの病院へ行ってもらっても結構」と言い放つ始末。同席したグループホームの施設長が「プロテクターをつけて私が介助しますのでレントゲンを撮ってください」と申し出、最終的に撮影をしてもらい診察を受けました。

整復師の方に膝関節をはめてもらい痛みは軽減したようですが、長年の脱臼の繰り返しで膝の骨がすり減っていて再発が懸念されるとのこと。ギブスを付け車いすとなりました。夫は市の健康診断を受ける際にも「指示が通らないのでこうした集団検診は無理です。」とやられています。認知症の人が病気やケガをした場合、こうした診療拒否があることを身をもって経験しました。

市では認知症条例（実際の条例名は、認知症の人とともに生きる地域条例）もできて何年か経過していても、現場ではこういうことが起きています。認知症の人も安心して診察が受けられる、また認知症とはどういう特性があるのかを理解してくれる医師が増えることを切に望みます。

（2025年9月22日付
上毛新聞）



〈賑わいを添えてくれた関連団体のブース〉



〈模擬つどいのひとコマ〉



〈県庁前からライブ！ライトアップに参加〉



〈ご講演いただいた荒井浩道先生〉



○富岡市立図書館における展示
 ご覧の通りの立派な展示を行って
 来ています。お送りしたポスター、
 リーフレットも展示していただきま
 した。

渡辺俊之の「わが家の認知症ケア手帳」
⑥4
専門家の「私」と当事者の「私」

渡辺医院院長（精神科医、当会顧問） 渡辺俊之



4月末に金沢市で日本家族療法学会
第41回大会が開催されました。

私は「認知症患者家族への支援・
専門家の『私』というシンポジウムに
司会として参加しました。認知症研究
の第一人者と同時に、家族の介護の当
事者経験がある方々が登壇して語り合
いました。

シンポジストの一人松本一生先生
（大阪松本診療所ものわずれクリニック
院長）とは、20年来の付き合いです
が、10年前から表舞台に出られなくな
っていました。お話によると、高齢の
両親と義母、認知症になった妻の介護
に10年間専心されていたとのこと、先
生はその間も介護ストレスに関連した
臨床研究を続けていました。介護者に
危機が訪れるのは、介護が一段落した
7年目が多いと報告しています。先生
自身も7年目に胆石になられるなど身
体的不調をきたしたとのことでした。



もう一人の登壇者で脳科学者の恩蔵
絢子先生は、認知症だった母親への介
護経験を語りました。「脳が委縮しても
母らしさは残っていた」と話し、笑顔
のお母さんの写真を見せてくれました。
「チビちゃんはどこに行っただの？」と
不安がる姿に、母の記憶の中で自分が
占める大きさを感じましたと言います。
そして、アルツハイマー型認知症の介
護では、その人が大事にしていたもの
が見えてくると、介護の思い出を懐か
しく語る恩蔵先生は娘のような優しい
笑顔をしていました。

2人の発表を聞きながら、私の介護
者支援を後押ししてくれているのは、
認知症になった祖父との体験なのだ
と思いました。



〈9月21日 記念講演会を終え、スタッフ・ボランティアの皆さんの記念撮影〉